

## 18. 形態学的変化のみられた十二指腸腫瘍の1例

鈴木功一, 鶴梶 実, 池内 哲  
横山 薫, 星野和彦 (小田原市立)

症例は64歳男性で, 胃潰瘍の定期的経過観察で, 十二指腸下行脚に25mm大の表面に浅い糜爛を伴う亜有基性の粘膜下腫瘍を発見された。定期的に観察していたが, 約1年間は変化無く, 約1年半後に, 形態が大きく変化した。今後, 癌化の可能性も考慮して, 治療する事となり, EMRを行った。病理にてBrunner腺腫と診断された。

## 19. 胃潰瘍による幽門狭窄症を合併した空腸癌の1例

新保 泉, 高部庸介, 鈴木秀明  
土屋正一 (国保大綱)  
中村俊太, 古谷成慈, 板橋輝美  
志村賢範 (同・外科)

60歳男性。平成14年11月嘔吐, 腹痛を主訴に当科受診。上部内視鏡にて胃潰瘍による幽門狭窄症と診断。保存的加療にて通過障害が改善せず, 外科的切除を考慮した。術前CTにて空腸癌を認めた。平成15年2月4日小腸部分切除および胃空腸吻合を施行。腫瘍は2型の高分化型腺癌で深達度はse, n0, ly3, v0。術後1年再発の徴候はない。類似の症状を呈する幽門狭窄症を合併し空腸癌の診断が困難であった1例である。

## 20. 悪性黒色腫小腸転移の1例

谷嶋隆之, 夏木 豊, 小林茂雄  
成田光朗, 谷嶋つね (山王病院)

症例は64歳男性。約4年前に皮膚悪性黒色腫切除歴あり。今回, 多発肝転移の増大あり入院。多発肝転移に対しては動注化学療法を施行。一方, 貧血の進行あり, 消化管検索を行ない, 小腸造影にて5cm大の腫瘍(単発)を認めたため, 外科的切除を行なった。組織学的にも悪性黒色腫小腸転移の診断となった。肝不全の進行により術後約1ヶ月で永眠された。悪性黒色腫小腸転移が経過中に診断, 治療された症例は少なく報告した。

## 21. 好酸球増多を認めた腸病変の2例

磯部美也子, 坂上信行, 野瀬晴彦  
田中武継, 岩間章介 (千葉労災)  
尾崎大介 (同・病理部)  
田口忠男 (横浜労災)

50歳男性, 腹痛, 下痢にて当院入院。血液検査にて好酸球の増多を認めた。大腸内視鏡にて全大腸にわたる軽度の浮腫を認め, 病理検査で好酸球の浸潤を認めたため好酸球性腸変と診断, PSL40mg投与開始したところ軽快した。51歳女性, 腹痛が持続したため当院入院。血液検査にて好酸球の増多を認めた。回腸末端部の軽度発生部位よりの生検にて好酸球浸潤を認めたため, 好酸球性腸変と診断, PSL40mg投与開始したところ軽快した。

## 22. 当院における大腸腫瘍の臨床的検討

中島賢一 (国保多古中央)

大腸腫瘍と年齢, 受診要因との関連について検討した。対象は全大腸内視鏡検査を行った229例。受診要因は, 検診異常, 有症状, スクリーニング, 経過観察, に分類した。進行癌は11例あり有症状59例中7例(11.9%), 検診異常111例中3例(2.7%), 経過観察48例中1例(20.8%), 早期癌は5例あり検診異常4例(3.6%), 有症状1例(1.7%)であった。検診による早期大腸癌発見の可能性が示唆された。

## 23. B型肝炎に対するラミブジン療法: とくにBreak-through後の経過について

奥川英博, 篠崎正美, 永田 豊  
伊藤賢一, 宮川 薫, 井上博喜  
平野達也, 菊池保治, 後藤信昭  
(沼津市立)

ラミブジン投与したB型肝炎の90例について, 長期経過を検討した。e抗体陽性例ではBreakthrough率も低く肝炎再爆までの期間も長く, 再爆の程度も軽くIFN治療を要するものはなく有用であった。

e抗体陽性例はADV治療前提での使用が望ましく, seroconversion率は低く, 達成されても質が悪いことがわかった。

## 24. B型肝炎硬変に対するラミブジンの治療経験

高橋正憲, 中堀 進, 関 厚佳  
鶴飼伸一 (県立佐原)

ラミブジンのB型肝炎硬変に対する投与は有用性が確立されていない。我々はB型肝炎硬変6例に対してラミ